

進化論を生んだ社会——ダーウィンの先駆者たち

ダーウィンの進化論の発表が、生物学における大革命であったことは誰もが認めるところ*¹です。そして、一般社会にも大きな衝撃を与えました。しかし、この進化論がダーウィンの独創なのかというと、そうでもないようなのです。

◎ダーウィンに消された男

*¹ チャールズ・ダーウィン（一八〇九—一八八二）。裕福な医師の家系に生まれるが、学校では劣等生。医学部に進学したが、医学に嫌気がさし、神学部に転学。そこも気に入らず、博物学に興味を持つ。ピーグル号というイギリスの戦艦での五年間の世界一周の航海に博物学者として参加し、海外の動植物や地質学的調査を行った。この報告はその後出版され、高く評価された。このとき着想した進化論を二〇年間研究し、一八五九年「種の起源」という書物で発表。学者としての地位を不動のものとする。航海中に得た持病から、一生定職に就くことができなかったが、家庭を持ち子に恵まれ、自宅で自然研究と著作の生涯を過ごす。

*² アルフレッド・ラッセル・ウォレス（一八三一—一九一三年）。イギリスの博物学者。世界を探検し、多くの標本を採集し、動物地理学の先駆的研究を

ダーウィンは進化論の発表に関しては、たいへん慎重でした。彼は誰にも文句をつけられないよう、進化の証拠をできるだけ多く集めようと、研究を続けていました。そんなある日、すでに博物学者として有名だったダーウィンのもとに、ウォレス*²という若い学者から手紙が来ます。同封の論文を読んでもらい、もし価値があると思つたら、それを発表してほしいというものでした。そこに同封された論文を読んで、ダーウィンは愕然とします。その内容は彼が二〇年も研究を続けてきた進化論の内容とほぼ同じものだったのです。いくら昔から研究を続けてきたといっても、論文という形にまとめたウォレスの方に発表の優先権があるのです。思い悩んだダーウィンは、友人の地質学者ライエルと植物学者のフッカーに相談します。

結局、ダーウィンは急いで論文を書いて、ウォレスの論文といっしょに発表しました。

行つ、それらの経験から「自然選択説」を着想する。心靈主義者、社会主義運動家の面もある。

見方によつては、ダーウインたちはウォレスの優先権を侵したようにも考えられます。翌一八五九年、ダーウインはそれまでの研究を集大成した『種の起源』という本を出版しました。これは当時のベストセラーとなり、結果的に、ダーウインは歴史に名前を残しました。が、ウォレスの名前は、今ではほとんど知られていません。

しかし、ダーウインとウォレスが同じ頃に、同じような理論を思いつくというのは、単なる偶然なのでしょうか？ この時代のイギリス人のこの二人が、同じ進化論を思いつくというのは、それなりの理由があるのです。

◎進化論の先駆者、ラマルク

生物の進化について発表したのは、彼らが初めてではありません。ダーウインが生まれた一八〇九年、フランスのラマルク^{*3}という学者が『動物哲学』という本を世に出しました。ここでラマルクは、生物学の専門家として初めて生物が進化するということをきちんと書いています。さらにラマルクの上司であるビュフォン^{*4}も、生物の進化については気がついていたようです。フランス王立植物園の館長で、由緒正しい貴族であったビュフォンは、しかし、このことをおっぴらには公表しませんでした。それには当時のフランスの社会情勢が関係しています。

フランス革命前夜、思想家の中に啓蒙主義者^{*5}といわれる人々が登場します。彼らは支

*3
ラマルク（一七四四〜一八二九年）。フランスの博物学者。用不用説という進化の要因論を提唱するが、世に受け入れられなかった。社会情勢とともに、彼の本が読みづらい文章であったためもある。職を失い、失明し、失意のうちに死亡。

*4
ビュフォン（一七〇七〜一八八年）。フ

ランスの博物学者、「博物誌」という膨大な百科事典的な著書が有名。科学性と哲学性を合わせもつ名著として、当時の思想・文化に大きな影響を与えた。

*5

啓蒙主義とは、一七世紀末にイギリスに芽生え、一八世紀に最盛期に達してヨーロッパの思想の主流となった革新的思想。フランス大革命をはじめブルジョア民主主義革命に先行するもので、合理主義、批判的精神をもって因襲、迷信を打破し、いろいろの伝統、特に教会の権威に反抗し、人間の尊重、新秩序の建設を主張した。

配階級である教会や貴族の言うがままだった民衆に、正しい知識やものの考え方を教えました。この行動が、結果的に階級制度の矛盾を民衆に気づかせ、革命思想を植えつけることになるわけです。

この啓蒙主義者たちの多くは自然現象についても、これまでの見方に従うのではなく、合理的に解釈しようとしていました。すると、たとえば化石などは生物の進化の証拠と考えられるしかありません。彼らの中から生物が進化するという考えが芽生えるのです。それはまた、社会体制も同じように変化してもよいのだ、という考えにもつながるものでした。このように革命思想と一体となって進化思想が生まれ出たため、上流貴族のビュフォンにはおおっぴらには言いにくかったのでしょうか。ところが、下級貴族でそれまで生活に苦労させられたラマルクは、むしろ階級制度にはうんざりしていました。そこで気がねなく進化について発表したのです。

しかし、フランス革命が、結局はたいへんな流血革命となりました。フランスの人々が革命や啓蒙主義にうんざりしていたちょうどその頃、ラマルクの本が出版されるのです。人々は革命思想と関連した進化思想を受け入れませんでした。ラマルクは世に受け入れられず、不遇のうちに亡くなります。

◎祖父と社会学者と詩人の進化論

ところが、海の内こうのイギリスでは事情がまったく違いました。

社会学者のスペンサー^{*6}は、チャールズ・ダーウィンよりも十一歳ほど若いのですが、『種の起源』より早く、生物の進化について発表しました。しかし、スペンサーの興味はむしろ人間社会にありました。人間は環境に適應する能力が、他の動物に比べ優れていたために大きく進化できたというのです。このような考えは、当時のイギリスの産業革命下の自由競争を肯定し、資本主義社会の思想的基盤となるものでした。

同じ頃、詩人のテニスン^{*7}が友人の死を悼んだ「追憶の歌 イン・メモリアム」という長編詩を出版しました。その中では、自然界での生存競争の無情さへの嘆きや、進化の考え方も織り込まれていました。そのため、この本は文学・宗教界だけでなく、科学界からも好意的に迎えられました。

さらに、ダーウィンのもっと身近なところに、進化の考え方はすでに芽生えていたのです。ダーウィン家は代々医者の家系でした。なかでも、チャールズの祖父に当たるエラスマス・ダーウイン^{*8}は、医者であると同時にさまざまな趣味をもつ人物だったようです。彼はビュフォンの影響を受け、生物の進化をテーマにした詩を書き残しました。ダーウインの進化論は、実は親ゆずりならぬ祖父ゆずりだったのかもしれない。

*6
ハーバート・スペンサー（一八二〇—一九〇三年）。イギリスの社会哲学者。ラマルクの影響を受けた独自の進化論に基づき、科学の分化した知識を包括し統合する総合哲学の体系を構想した。

*7
アルフレッド・テニスン（一八〇九—九二年）。イギリス、ピクトリア朝の代表的な詩人。さまざまな形式の詩を書き、多くの名作を残した。

*8
エラスマス・ダーウイン（一七三二—一八〇二年）。イギリスの医師、詩人、博物学者。チャールズ・ダーウィンと優生学者で探検家のゴルトンの祖父。その詩集の中で、やや空想的な進化論を述べている。

◎ダーウィンを生んだ社会

このように、ダーウィンの先駆者はずいぶんいたのです。そして、ダーウィンの進化論が（宗教界から多少の攻撃はあったものの）、すんなりと社会に受け入れられ、『種の起源』がベストセラーになったのは、当時のイギリス社会に、すでに素地があつたからでした。イギリスは、すでに産業革命を経験し、資本主義社会を形成していました。そのため、当時の人々はまさに「生存競争」の中にいたのです。激動する社会の中で、人々は自然界も変化するということをすんなりと受け入れたのでしよう。これがラマルクの当時のフランスと大きく違うところでした。

つまり進化論は、一九世紀のイギリスに生まれるべくして生まれてきたものだったと言えます。ダーウィンとウォレスの共同発表事件がそれを証明しています。

自然科学の研究というものは、一般社会から切り離された独自の世界と思われがちです。しかし、世の中の流れを一番に先取りし公表するため、科学者たちが競争しているようすは、学問の世界に限らず多くの人間活動に共通した出来事のように見えます。

◎ダーウィンの後継者たちの罪

このように進化論は誕生の頃から、人間社会の出来事と比較されてきました。ダーウィンはこれを嫌い、自分の学説を自然科学上の生物のことに限定します。しかし、ダー

ウインの進化論が社会に受け入れられた原因は当時の社会情勢にあり、そのため、社会に大きなインパクトを与えたのです。そこで、ダーウイン学説を人間社会の現象に当てはめようという動きが生まれます。これを「社会ダーウイニズム」と言います。ダーウインの手を離れた進化論は、社会思想として勝手に一人歩きを始めるのです。

*9
エルンスト・ヘッケル（一八三四—
一九一九年）。ドイツの生物学者、哲学者。

*10
優生学は結婚制限や断種などによって人間の遺伝的改善をはかるうとした。ドイツでは、さらに優秀な民族が生存競争によって他の民族を服従させるという理論にまで発展した。

参考になる本

『近代進化思想史』八杉竜一著、中央
公論社、一九七二年

それが極端なかたちで現れるのがドイツです。ドイツも進化論の影響を大きく受けました。これに大きく貢献したのがヘッケル^{*9}という科学者です。彼はドイツでのダーウインの擁護者として大活躍し、一般向けの本も出版しました。ここで彼は、同じ頃に社会に受け入れられていた社会主義の平等主義的ヒューマニズムを否定し、生存競争を中心とした新しい倫理を求めました。このようなヘッケルの本もまた、多くの人々に読まれました。これにより一般人に進化や遺伝に対する興味をもたせ、生物学の発展に貢献しました。反面、全体主義や民族主義、つまりその後のナチスの登場を準備したとも考えられます。^{*10}

（細野春宏）